

## A Dialogue Model of the Discourse Structure for the Oral Proficiency Interview<sup>1</sup>

ダイアログ・モデルによるOPIの会話構造分析

Yoko Matsumoto-Sturt (松本スタート洋子)

University of Edinburgh

### 1. はじめに

本論においては Oral Proficiency Interview (OPI) の会話をこれまでの会話分析、談話分析の手法とは異なる dialogue game モデルの枠組みで分析し、その会話構造の特性と会話の動的な流れを考察する。

これまで数多く行われてきた英語の会話分析や談話分析の先行研究は、大きく分けると以下のようなものがある。まず、社会学の関連分野でエスノメソドロジーの技法を用いた Sacks や Schegloff (1979) に代表される会話分析 (conversation analysis) の研究がある。次に Sperber and Wilson (1986) の「関連理論」や Grice (1975) に代表される語用論的、哲学的な領域での研究。そして、言語の機能に焦点を当てた談話分析 (discourse analysis) を行う研究者 (e.g. Brazil, 1985; Sinclair, 1992; Sinclair and Coulthard, 1975; Stubbs, 1983) たちの一派による先行研究がある。

本論は、主にイギリスで研究活動をする談話分析の研究者たちによる全体的な研究成果を Conversational Game Theory (以下 CGT と略す) として捉え、CGT 系のモデルで dialogue game または conversational exchange として知られる「ゲーム」の概念を基盤とするダイアログ・モデルによる日本語 OPI の会話構造の分析を行うものである。

### 2. ダイアログ・モデルとは

CGT 系のダイアログ・モデルの代表例としてエディンバラ大学の Human Communication Research Centre (HCRC) が 1990 年代の後半に開発した「地図課題コーパス」

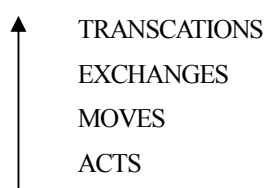
---

<sup>1</sup> Acknowledgment: I would like to acknowledge that this paper is supported by the British Academy Overseas Conference Grant (OCG-381917).

(Map Task Corpus) があげられる。このコーパスは、二人のイギリス英語の話者が共同で達成する地図課題の課題遂行会話 128 対話、約 15 時間を収録したものであるが、コンピュータによる解析を想定しており、分析単位 (unit) の認定、それに続く範疇化とラベル付与 (coding) の作業過程が研究成果として発表されている。この電子化プロジェクトにかかわった Isard & Carletta (1995) も認めているように、「地図課題コーパス」で使われている coding は、Sinclair & Coulthard (1975) が英国の小学校の教室で収録した教師と生徒の会話データを分析するために考案したダイアログ・モデルや Houghton (1986) の計算モデルなどを参考にして開発された。

本論では Sinclair & Coulthard (1975, 1992) モデルの「ランク」の概念を中心にして CGT モデルの特徴を考察する。Sinclair & Coulthard (1975, 1992) は、言語単位 (unit) がどんな構造をもつのか、各ユニット間の関係をどう記述するのかを検討した結果、単語 (word) が形態素からなり、同じランクの他のユニットと結合することでもう一つ上のランクであるフレーズを構成している文法的なランクと似たようなものが会話の構造にもあるという結論に達し、図 1 で示すようなランク構成を提唱した。

図 1 : 英国小学校の教室における L1 会話の構造



(Sinclair & Coulthard, 1992)

Sinclair & Coulthard (1992) は、分析の最少ユニットを ACT という概念により認定し、いくつかの ACTS が MOVE を構成し、さらに MOVES の集合がその上位ランクの EXCHANGES、さらに上位の TRANSCATIONS を構成している L1 モデルを提唱した。HCRC 地図課題コーパスのモデルでは MOVE—GAME—TRANSCATION の 3 レベルの談話構成を設定し、最少ユニットとして MOVE を認定している。

## 2.1. ACTの種類と例

図2に分析の最少ユニットである ACTS の代表的な例を挙げ、分類を試みた。さらに、英語の L1 教室で認定された ACTS が、通常 L1 と L2 話者の対面インタビューの形式をとる OPI 会話の構造分析に使えるのかどうかを考察してみたい。

### 図 2 : ACTS の例

1) 教室での ACTS <i>evaluate</i> (評価), <i>check</i> (確認), <i>prompt</i> (返答の促し), <i>clue</i> (ヒント), <i>bid</i> (参加要請), <i>nomination</i> (参加許可), <i>comment</i> (情報追加), <i>accept</i> (提供情報の容認), <i>conclusion</i> (まとめ), <i>loop</i> (聞き返し),
2) 質問と命令 <i>elicitation</i> (言語的反応の要請), <i>reply</i> (言語的反応), <i>directive</i> (行動の要請), <i>react</i> (行動による反応), <i>acknowledge</i> (理解・了解の通知),
3) 談話の管理 <i>marker</i> (談話境界マーカー), <i>starter</i> (注意の引き寄せ), <i>metastatement</i> (直後に生じる会話内容の伝達), <i>aside</i> (独り言)

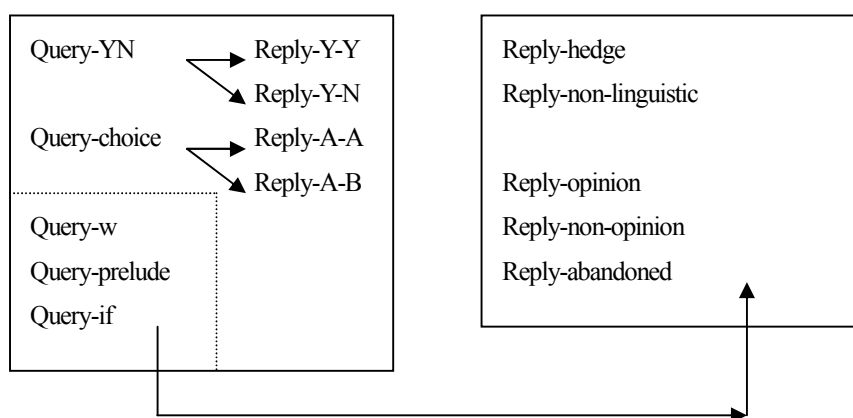
(Sinclair & Coulthard, 1992:19-21. 日本語訳と分類は筆者による)

例えば *evaluate* (評価) は、生徒の返答に対して ‘good’, ‘interesting’ や ‘team points’ など教師が評価で使う表現をまとめた ACT である。ACT には「ペンを用意してください」という教師の言語的な要求に対する生徒の非言語的な *react* (行動による反応) のようなものも含まれている。図2の1) には OPI テスターがインタビュー実施に際して「してはいけない」(ACTFL-OPI 試験官養成マニュアル, 1999: 72-75) とされる ACTS が多いことに気がつく。一方、図2の2) と3) に分類された ACTS は OPI の談話分析にもすぐ応用できると思われる。

## 2.2. OPIにおける Elicitation Acts

対面インタビューである OPI の基本的な談話を構成しているのは質問とそれに対する答え、つまり *elicitation* (言語的反応の要請) と *reply* (言語的反応) の2つの Act である。図3は *ACTFL ORAL PROFICIENCY INTERVIEW TESTER TRAINING MANUAL* (1999: 42-45) の質問の型 (Question Types) とそこから予測できる返答を CGT モデルの枠組みで再分析し、Elicitation acts としてまとめたものである。

図 3: OPI ダイアログの Elicitation Acts



Query-YN (はい/いいえ疑問文) が期待する言語的な反応は Reply-Y-Y (はい) か Reply-Y-N (いいえ) である。同様に Query-choice (A か B かの選択疑問文) が期待する言語的な反応は Reply-A-A (A です) か Reply-A-B (B です) で、質問によって期待される返答がない場合は、Reply-abandoned (返答無し) となる。一方、点線の枠内にある Query-w (事実や情報を求める疑問文)、Query-prelude (前置き型の質問)、Query-if (仮定的な質問) の3つの質問の型は、Query-YN や Query-choice に比べるとより複雑な言語的な反応を期待しており、図3では矢印で結ばれた右のコラムにある5つのタイプの Reply (返答) としてまとめてある。まず、Reply-hedge は言語的挫折につながる「迂回」、Reply-non-linguistic はうなずきに代表される非言語的な反応、Reply-opinion は意見表明を含む言語的返答を、Reply-opinion は意見表明を含まない描写などの言語的反応を表す Acts である。図3は、CGT モデルによる談話分析は、話者が話した結果として残される静的なアタランス (言

われたこと)の分析に加えて、これから言われることの予測がある程度可能なことを示している。

### 2.3. MOVEの種類と例

MOVEはACTSからなる。それらのMOVES自体がEXCHANGEの構成要素となる。Sinclair & Coulthard (1992: 21-25)によると、MOVEの構造は(1) Framing, (2) Focusing, (3) Opening, (4) Answering, (5) Follow-upの5つのMOVE class (カテゴリ)で分類することができる。さらに(1)と(2)のMOVEによって会話の開始と結びのシグナルとなる談話境界のEXCHANGEが構成され、(3)–(5)のMOVEが授業の進行に従うEXCHANGEを構築していく。図4はOPIの談話分析に役立つと思われる3つのMOVEからなる典型的なEXCHANGEの構造 (Sinclair & Coulthard, 1992: 85) をまとめたものである。

図4: EXCHANGEレベルのthree-move 談話ユニット

1 <sup>st</sup> move	Initiation
2 <sup>nd</sup> move	Response
3 <sup>rd</sup> move (optional)	Follow-up

#### 例1

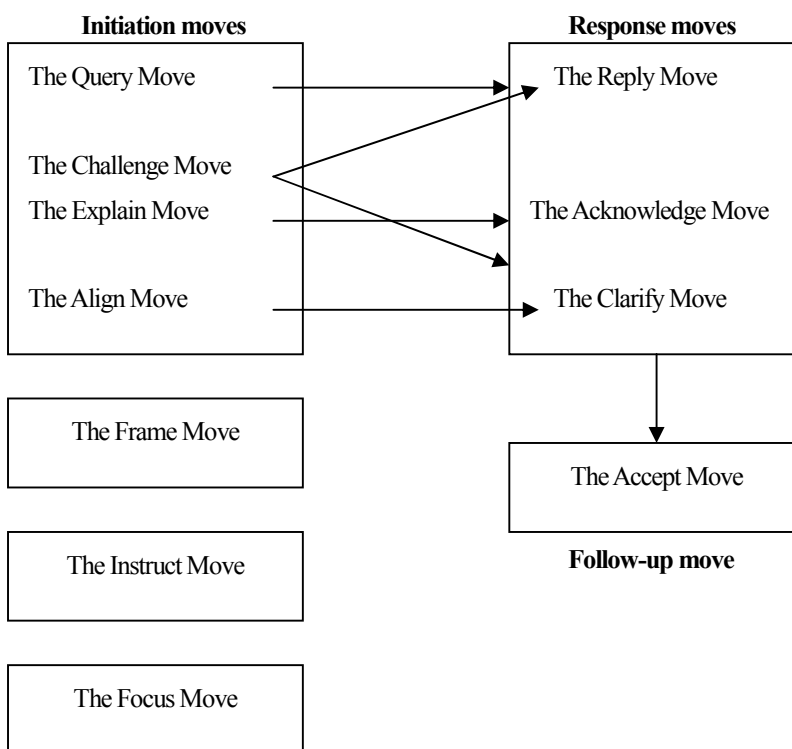
**Initiation**           Teacher: What time is it, Susan?  
**Response**           Pupil: Three o'clock  
**Follow-up**           Teacher: Good girl

例1を使ってthree-moveの構造を検討してみると以下ようになる。日本語で言えば「よくできました」にあたる例1の第3moveは、エスノメソドロジーの枠組みで行われる研究でよく使用される「隣接応答ペア」(adjacency pair)に後続ユニットが1つ追加されただけのようにも解釈できる。これに関してCoulthard & Brazil (1992:52)は、自然の会話には質問に対する答えが戻ってこない例が多くあることを指摘した上で、ペアの2番目の談話ユニットが必ず生じなければならないという規範的な構造を持つ「隣接応答ペア」において、この構造に相当しない部分は2つの応答ペア間に「挿入された」と見なすことになり、

それが分析を複雑にしていると「隣接応答ペア」の概念の欠点を指摘している。この観点からOPIの会話データを見てみると、「隣接応答ペア」に代表される two-move からなる談話ユニットでは分析しきれない会話の構造を持つ発話サンプルが多いことに気づくだろう。

図5は **I**(*initiation*) → **R**(*response*) → **F**(*follow-up*) からなる three-move から予測できる Move をまとめたものである。次に図5の中から **ALIGN** → **Clarify** → **Accept** の three-move 構造を持つOPI会話サンプルである例2を分析し、分析の際に問題となる Move を特定してみたい。

図 5 : **I** → **R** → **F** の three-move 構成で予測される会話の動き



### 例2 : ALIGN Move の分析

I	1. うちの母がビーガンなんですよ。	Statement
A=I	2. <u>誰</u> がビーガン?	Alignment
R	3. <u>母</u> です。もう肉, 魚類, 一切とらないんです。	Clarify
F	4. ふ〜ん。そうなんですか。	Accept

例2の分析に「隣接応答ペア」の概念を使おうとすると, **I(nitiation)**である例2-1. が質問の形をとっていないことからペアの第一要素として分析できない上, 後続の挿入ペアの例2-2. と3. も大きな枠での第2ペアにはなれない。さらに例2では, 「うちの母がビーガンなんですよ」「そうなんですか」と続かないために, **two-move** からなる談話構造に収まらない「会話の戻り」(期待に反する答えの出現で第2 MOVE が完結しない) を分析する際に問題があることが分かる。特にOPIでは, 被験者の正確な発話レベルを抽出するために, テスターが意図的に「聞き返す」, 「もう一度確かめる」などの「会話の戻り」が起こる頻度が高いことから, **three-move** で構成される EXCHANGE が多いことが予測される。

### 例3 : CHALLENGE Move の分析

I	1. 日本はどこに住んでいましたか。
R	2. えーと, <u>国際きょうりゅう</u> 会館です。
C(hallenge)= I	3. きょうりゅう?
R	4. うん。きょうりゅう...ですね。

次に CHALLENGE move を含む例3をみてみよう。日常会話では聞き間違いから会話が一時的にあらぬ方向に行ってしまったということはよく起こるが, 例3-2. の「きょうりゅう」はテストターの聞き間違いではない。前語の「国際」から意図されている語が「交流」であることはすぐに分かっていても, テスターは口が滑ったために起こった言い間違いなのか, それとも「きょうりゅう」で定着してしまった本当の間違いなのかを確かめる必要がある。そこで, 例3-3. で聞こえたままをオウム返しすることでこれを確認しようとしている。このような発話サンプルはOPIのデータによく見られる。

例2と3に挙げた2つの Move の共通点は「先行する会話から予期されている答えが戻

ってこない」という点であり、聞き逃しの構造を描写できる ALIGN → Clarify → Follow-up と CHALLENGE → Correction → Justification は同一ではないが、この2つの Move に明確なボーダーラインをひけない例があることも考えられる。従って、CHALLENGE Move を必ずしも「挑戦」として解釈する必要はなく、OPI の発話データにおいては、CHALLENGE は、Clarify (説明) や Reply (返答) などの第2 Move を持つ「突き上げ」や「トリプルパンチ」へつながる第1 Move であると考えられる。

これまでの日本語OPI 関連の先行研究ではテストの談話管理の方略を考察したものが余り見られないことから、最後に談話の管理者としてのテストが使う談話管理の方略を例4で分析してみたい。例4は『ACTFL OPI 入門』(牧野他 2001: 204) から超級話者の OPI サンプルを引用したものである。

#### 例4 : 談話管理の分析

- I            1. …とって私は北京は行ったことがありませんが。  
R            2. ああ、ぜひ来てください。  
C=I        3. ええ、あのね、上海とそれから西安は知っているんですけどね。  
R            4. あ、そうですか。

テストは、導入部の自己紹介で「北京からきた」と答えた被験者に町を描写するタスクを与える伏線として「北京に行ったことがない」ことを聞き手に伝えるが、超級話者である被験者は I: 情報提供 (行ったことがない) → R: 誘い (来てください) → F: 受諾 (ありがとうございます) という普通の会話の流れを瞬時に想定したと思われる「ああ、ぜひ来てください」という次のタスクにつなげることでできない返事を返してくる。

まとめると、被験者のこの誘いを受けることで1つの Exchange がきれいに完結してしまい、テストは自分の意図するタスクを与えられないだけでなく、次に始まる I で被験者主導の「北京に行く」というトピックで次の Exchange が始まる可能性もあり、たとえ一時的であるにしてもテストが会話の主導権を失う可能が出てくる。そこで第3 Move でテストの使った方略に注目してみると、テストは誘いを受けることになる「ありがとう」や「そうですね」を避け、自分の次の発話に注意を向けさせる機能を持つ「あのね」でタスク導入の仕切り直しを行っている。つまり、テストは被験者の予想していなかった Challenge Move を返すことで会話の主導権を取り返していることが分かる。これによ



り、この OPI サンプルではテスター主導のまま後続の Exchange が続けられていることから、この第 3 Move (C = I) の重要性が理解できるだろう。

### 3. まとめと今後の課題

本論では、CGT モデルの枠組みで日本語 OPI における会話の構造や流れの分析を L1 テスターと L2 被験者の両面から行った。OPI の会話はフリーの会話のように自然のものではないという批判をよく受ける。確かに OPI が「インタビューで言語能力を測定するテスト」である以上、フリーの会話に見られるような会話の重なりは談話の管理者であるテスターによって意識的に避けられているために OPI の会話構造は転記テキストを見てもすっきりとしている。しかし、本論の例文の分析から OPI の談話構造は「インタビュー」という特定のディスコース・ジャンルが示唆する「質問」とそれに対する「答え」という 2 つの談話ユニットのペアだけから成り立っているのではないことが分かった。また超級話者とのトピック管理の主導権争いの例に見られるように、OPI のディスコースにおける発話の流れは、事前に計画されたものではない自然発生的な動きを持つことも明らかになった。

本論の分析では、英語の L1 で認定された ACTS が、日本語 OPI 会話の構造分析に十分適用できることを示した。今後の課題として、本論で日本語 OPI のために設定した dialogue acts が他言語での分析でも同様な結果を生じるのかについての検証が必要と思われる。また、次の研究段階の方向性として、まとまった数の OPI データを使ったラベル付与を複数で行い、その信頼性を検討する必要があるだろう。

### References:

- 牧野成一 (監修) (1999). 『ACTFL—OPI 試験官養成マニュアル』株式会社アルク  
牧野成一・鎌田修・山内博之・齊藤真理子・荻原稚佳子・伊藤とく美・池崎美代子・中島和子(2001). 『ACTFL OPI 入門』アルク
- ACTFL (ed.). (1999). *ACTFL: Oral Proficiency Interview: Tester Training Manual*. ACTFL, Inc.
- Brazil, D. C. (1985). *The Communicative Value of Intonation*, Birmingham: English

Language Research.

- Coulthard M. & D. Brazil. (1992). Exchange structure. In Coulthard M. (ed.), *ADVANCES IN SPOKEN DISCOURSE ANALYSIS* (pp.50-78). Routledge.
- Grice, H. P. (1978). Further notes on logic and conversation. In Cole P. (ed), *Syntax and semantics 9: Pragmatics*. Academic Press, New York.
- Houghton, G (1986). *The Production of Language in Dialogue: A Computational Model*. Ph.D. thesis, University of Sussex.
- Isaard, A. & J. Carletta. (1995). *Transaction and Action Coding in the Map Task Corpus*. Research paper, HCRC/RP-65.
- Sacks, H. & Schegloff, E. A.. (1979). Two preferences in the organization of reference to persons in conversation and their interaction.. In Psathas, G (ed.), *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology* (pp.15-21). New York: Irvington.
- Sinclair, J. M. & R. M. Coulthard. (1975). *Towards and Analysis of Discourse: The English used by teachers and pupils*. Oxford University Press.
- Sinclair, J. M.. (1992). Priorities in discourse analysis. In Coulthard M. (ed.), *ADVANCES IN SPOKEN DISCOURSE ANALYSIS* (pp.79-88). Routledge.
- Sinclair, J. M. & R. M. Coulthard. (1992). Towards and Analysis of Discourse. In Coulthard M. (ed.), *ADVANCES IN SPOKEN DISCOURSE ANALYSIS* (pp.1-34). Routledge.
- Sperber, D. & D. Wilson. (1986). *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.
- Stubbs, M. (1983). *Discourse Analysis*. Oxford: Basil Blackwell.